

箴言 3章 13～20節 ヨハネによる福音書 10章 31～42節

世界聖餐日、世界宣教の日を迎えました。何事もなければ、今日は、世界中の主にある兄弟姉妹と聖餐を共にし、福音宣教への思いも新たにさせられたことでしょう。しかし、今年は、そういうわけには参りません。週報にあるように、コロナ禍ゆえの警戒を怠るわけにはいかないからです。しかし、聖餐も、福音宣教も、私たちにとっては大切なものです。ですから、それをなおざりにすることは私たちにはできません。ところが、今は、状況がそれを許しません。ただ、それは私たちも十分に分かってはいることです。けれども、それだけにまた複雑な思いに駆られているのがこの日を迎えた私たちでもあるのです。そこで、何事もなくすべてのことができたときのことを思い返し、今の、この、今まで通りに何もできないこの時を思いますと、今までと今とではいったい何が違うのでしょうか。

そこで、先日、ある牧師先生からこんなご指摘をいただきました。一つには、今は、集まること自体が難しくなっているということですが、ただし、私たちがこうして集まっているということは、漠然とただ集まっているわけではありません。私たちの集まりの中心には、いつも御言葉と祈りが置かれており、従って、集まりにくくなっているということは、それだけ御言葉に触れる機会が減ってきているということです。つまり、私たちの信仰がそれだけ弱められているということです。二つ目は、聖餐は、私たちがキリストの命に与る恵みの出来事であり、それに与れないということは、キリストの命が枯渇しつつあるということです。そして、三つ目ですが、では、信仰が弱められた私たちはそこでどうなるのか。それは、有り体に言えば、お腹をすかせ、そのため体力が失われつつあるということです。ですから、その場合どうということが起こるかということ、神様への疑いを強くし、結果、キリストによって生かされている私たちの命そのものが脅かされることになるということです。つまり、

分からないとの思いを募らせることで、信仰的には死んだ状態に置かれかねないということ、そのような危険にさらされているのが今の私たちであるということです。先日ある方からこう聞かされ、私自身もなるほどと思わされたわけですが、しかし、その時、私の中の声としては、とても小さいものではありませんでしたが、それとはまた別のものがありました。そして、今日の御言葉に繰り返し聞いていく中でその声は少しずつ大きくなって行き、今度は、イエス様の声として、一端肯いたその意見を打ち消すまでになったのです。

これまでと今とを比べ、状況は確かに芳しくありません。けれども、この違いは、私たちの信仰を弱めるためだけに目の前に置かれているものなののでしょうか。こうして御言葉に聞いていくと、私たちの信仰を弱めるどころから、強める方向に働いていると思えるのです。なぜなら、今、私たちの目の前にあるのは主の御心であり、主の御心とは励ましこそすれ、弱めるようには作用しないものだからです。ここでは、そのような神様の働きを主イエスご自身が「私は父が与えてくださった多くの善い業をあなたがたに示した」と仰っておりますが、この善き業についてイエス様は、ご自分への敵意をむき出しにするその相手を前にして語るのです。このことはつまり、神様の善き御心、善き業が、この時のイエス様をしてそのように冷静に対処させているということです。ですから、神様の善き業は、その人を弱めるどころか、強める方向で作用しているのは間違いありません。そして、なるほど、そうだ、と思ったのは、この時のイエス様の勇ましい姿だけに触れたからではありません。この時のイエス様がああだこうだということだけを御言葉は言いたいのではなく、イエス様の姿とはつまり、イエス様を頭とする教会であり、それがイエス様を信じる私たちそのものの姿であるということです。そして、それは、これまでの教会と私たちの姿を見れば明らかです。なぜなら、こ

れまで何度となく命の危険に曝され続けてきたのが教会であり、私たちであるからです。

ですから、逆境に曝されたのは、この度のコロナ禍が初めてではありません。パウロが第二コリントの12章で「それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」と言っているように、逆境の中をこれまで生きてきたのが私たち主の教会であり、まただから、そうした厳しい状況を繰り返し経験する中で私たちに知らされることになったのです。それが自らが弱いということですが、ただそれだけではありません。そのことに加えてもう一つ、そこで知らされたことは、この弱さに働く主の力強さでありました。ですから、それを知っているのがこうして主の教会に集められている私たちであり、まただから、この神様の「善き業」のお陰で、教会は絶えてなくなることなく、今日を迎えることになったのです。

それゆえ、弱さを経験し、弱さを知った私たちは、その弱さを信仰をもってまた別の形で世に現して行くこととなります。パウロは、それを強さと呼ぶのですが、ただ、そこで大事なことは、弱いか強いかという比較の問題ではありません。弱さを知らされる中で人々が感じることは信仰ゆえの喜びです。そして、それは、自分というこの小さい器の中にどれだけ多くのものが詰まっているかということではありません。そこで得られる気持ちの高ぶりではなく、弱く、卑しいこの私が神様とイエス様によってその御手の中に捉えられている、このように、与えられ、満たされているがゆえの喜びです。ですから、この喜びについては、また別の言い方をすることもできるのでしょう。それは、神様とイエス様との一体感ということですが、それが、イエス様がここで「父が私の内におられ、私が父の内にいることを、あなたたちは知り、また悟るだろう」と仰っていることなのです。

ですから、この、神様を知り、イエス様を知った喜びは、私たちの背中を強く押すこととなります。福音を宣べ伝える

ということはそれゆえのことでもありませんが、ですから、それは、時に、私たちの想像を遙かに超えた形で世に現されることとなります。ヨーロッパを訪ねた日本人旅行者の多くの心を打つ荘厳なゴシック建築も、また、大伽藍の中で奏でられる重厚なオルガンの響きも、信仰として現された当時の人々の喜びが、その人々たちをしてそのように形作らせることになったのです。ただし、それは、作った人々の信仰的自己満足がそうさせたわけではありません。遠く、ヨーロッパで起こった信仰ゆえの喜びが、はるばる海を越え、山を越え、地の果てと言われる私たちのところにこうして辿り着くことになったように、そこにはいわゆる損得を抜きにした喜びがありました。そこで、旅行者がよく言うことは、「本物に触れて」ということでもありますが、けれども、物理的な様々な隔たりを超えて私たちの元に届けられた喜びの声に本物も偽物もありません。多くの人々の胸を打ったように、弱さの中に働く神様の力は常に力強く、それゆえ、人々の心を捉えて離さないものなのです。そして、私たちの誰もが感じている、この信仰ゆえの喜びは、自分だけを喜ばせて終わるものではありません。海を越えて私たちの国にやって来た宣教師たちがそうであるように、弱さを知った人々は、そこに働く神様の強さを分かち合う方向で動くのです。

そこで、昔聞いた一つの話思い出しますが、それは、組合教会の伝統に生きるある教会のことです。その教会は前の会堂建築の際に、海外のミッションから多額の献金をいただいたそうですが、約束した献金が日本に送金される前日のことでした。送る側の教会の礼拝堂が火事で全焼してしまったのだそうです。しかし、送金を控えていたことから手元には多額の献金が残されていました。ただ、約束は書面をもって交わされたわけではありません。神様の御前において互いに約束し合ったことであり、ですから、事情が事情ですから、勘弁してもらうこともできたのでしょう。ところで、このようなとき、皆さんならどうするでしょうか。きっと、いろいろな言い訳があふれ出て、それこそ神様の御前に自分自身の弱さを露わにすることにもなるのでしょう。けれども、会堂を失った教会の人た

ちは自分の思いに溺れ、また流されることなくその約束を実行したのです。こうして、その教会は新しい会堂の献堂することになったのですが、ただ、この話を聞いて驚いたことのはその後日談です。送ったアメリカの教会も、一、二年後には、新しい会堂を喜びの中に主にお献げすることができたそうですが、それは、彼らが何もかもすべて失ったとき、一切の必要はすべて主が与えてくださると、そのことを自明のこととして強く信じていたからでもありました。つまり、ここでのイエス様のように、落ち着いて逆境と向き合うことができたということでもあります。そこで、私たちの多くは、どうしたらそうなれるのかと考えるのでしょうか。そして、そうあらねば、そうせねばと、自らの弱い信仰を認めるがゆえに強さを求めたりもするのでしょうか。けれども、私たちに求められていることは、そういう何かをする上での強さなのでしょうか。

私はここで二つのことにすごく心を動かされることになりました。一つは、イエス様というお方が実に融通無碍なお方であるということです。それは次のイエス様のお言葉から分かります。37節でイエス様はこう仰っています。「もし、私が父の業を行っていないであれば、私を信じなくてもよい。しかし、行っているのであれば、私を信じなくても、その業を信じなさい。」と、信じなさいというところからではなく、信じなくてもいい、しかし、事実だけは認めよと仰っているのです。そして、私が心動かされたもう一つのこと、それゆえにまた、無理を通そうとはしていないことです。39節の後半部分に「イエスは彼らの手を逃れ、去って行った」とありますが、自分の主張するところに拘るのではなく、これはまずいと思ったら、さっさとその場を離れているのです。学者はそのわけを「その時」が訪れていないからと説明しますが、「その時」とはつまり、十字架の時です。ですから、確かにそれが一番の理由であり、そこから離れて何かを考えることはできないのでしょうか。しかし、イエス様は、神様に操られているだけのお方ではなく、ましてや、自称神の子といった、そんなあやふやなものでもありません。逃げ時を見極め逃げ出したのは

間違いないのでしょうか、イエス様がそう判断したのは、自分の心の内側だけを見てのことではありません。

事実を見つめよ、信じよと、殴りかかろうとする人々にイエス様が落ち着いてものを言っているように、イエス様がその場を離れたのは、状況を冷静に判断し、意識的にそうしたということです。それは、信仰の喜びというものが分かち合う方向で作用するように、ご自分のことだけでなく、イエス様が目の前にいるその相手のことも考えていたからです。なぜなら、イエス様が我を張り、また、もし保身だけに走るようなことがあれば、信じなくてもいい、でも、事実だけは信じなさいと、こう仰っていることのすべてが台無しにされかねないことになるからです。それは、分かち合うということが自分の我を張ることではないように、信じるということもまた、我を通すことではないからです。このことはつまり、神様にお委ねし、お任せする姿勢を、イエス様が大切にしていたということでもあります。まただから、私たちもイエス様からこの姿勢を学ぶことになるのです。

ですから、神様にお委ねするという私たちの行為は、経験に基づく知恵が私たちをしてそうさせると言えるのでしょうか。それゆえ、私たちが大事にしているこの姿勢は、自分の身の振り方だけを考えればいいという狭量なものとはなりません。自分のことに加えて、目の前の相手のことも見ていなければならぬし、つまりは、相手とどうすれば信仰の喜びを分かち合うことができるのか、どうすればその芽を摘まずに次に繋げることができるのか、そういうところ見つめ、その上で身につくものが、神様にお委ねする姿勢であるということです。ですから、そう考えると、今の私たちに向かって、今日の御言葉が語りかけてくれていることは、何かをするしないということへの拘りではありません。強くなりなさい、こうすればだから強くなれる、そういうものではないということです。

今に限ったことではなく、どんな時にも常に自分自身の中の課題を見つめているのが私たち信仰者だと思います。そして、今のような非常事態の中では、私たちの弱さ、卑しさ、罪深さゆえに、様々

な課題が私たちの手の届くところ、目に見えるところに現れ出てくることになります。イエス様に拳を振り上げている人々がまさにそういう人たちであると思いますが、ただ、イエス様さえいなければ、その人たちもそんな自分の姿を世にさらすこともなかったのでしょうか。ですから、そういう意味でイエス様は意地悪なお方だとも言えるのでしょうか。けれども、自分のことを信じなくてもいい、でも、現実だけはしっかりと見つめよと、逃げ道を備えてくださっている方が本当に意地悪な方なのでしょうか。また、正面からぶつかれば、誰も太刀打ちのできないお方が私たちのイエス様であるはずです。ところが、そのイエス様がその場を離れたというのは、意気地無しの腰抜けだったからなのでしょうか。しかも、イエス様ほど人からたくさん悪口を言われた方はいないわけですから、なおさらそう考えることもできるのでしょうか。ただ、私たちがそういう声に耳を貸し、面と向かってイエス様に悪口をいうことはありません。それは、イエス様のことを信じているからです。しかし、信じつつも、そのイエス様のことが分からなくなることがあります。もしかしたら、それが今なのかもしれません。そして、分からないがゆえにいろいろと動き回り、ますます分からなくなる。まただから、どうすることもできないために、どうすればできるようになるのかと、何かをすること、できること、そればかりを考えることにもなるのでしょうか。ですから、この落ち着かない気持ちが私たちのその背中を押して、ますます何かをさせようとするのでしょうか。そのため、この落ち着きのなさがさらに私たちの落ち着きを失わせ、強さへの拘りを募らせていったりもするのでしょうか。

私たちの多くは、何かをすること、何かができることが強いことであり、それゆえに素晴らしいことだと、そう思い込んでいるところはないのでしょうか。まただから、今の状況のように何もできないとき、したくてもどうすることもできないとき、自分は弱い、だからダメだとそう思い込んだりすることにもなるのでしょうか。けれども、イエス様を信じる私たちにとって、弱さとはイエス様によって受け止めていただくものであって、自分

で否定すべきものではありません。ですから、それについて、御言葉はこう語ります。「イエスは、再びヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていたところに言って、そこに滞在された」と、そして、「そこでは多くの人々がイエスを信じた」と。つまり、イエス様がとどまる場所に同じように集まり、とどまる者がイエス様を信じる者であり、このことはつまり、私たちに求められていることは、何かをすること、しなければならないと思うこと、そのためにこうあらねばならないとあれこれ考えること、そういうことではないということです。そうではなく、御言葉が、「そこで」多くの人々がイエスを信じたと語るように、そこに「いる」ということ、イエス様の御前にこうして「いる」ということ、私たちに求められることは、何かを「する」ことではなく、「いる」ことです。けれども、ただし、「いる」ことは耐えがたいものでもあります。そこで、それに耐えきれずにあれこれと手を出して動き回ったりもするのですが、そこで露わにされるのが自分自身の弱さでもあるのでしょうか。けれども、イエス様の御前で自分自身の弱さを見つ、じっとそこにとどまるからこそ、そこで私たちは知ることになるのです。それは、弱い私たちのことを神様とイエス様がお守りくださっているということです。ですから、今のようになんかをしたくてもできないときには、無理になんかをしようとするのではなく、まず「そこにいる」ことが大切なことだと思います。それは、「いる」ということはただいるだけで終わるものではないからです。そこに「いる」からこそ、そこから恵の出来事が始まっていくことになるからです。それは、そこにいればこそ、私たちはそこからいろいろなことを学びまた身につけ、イエス様を信じるにふさわしく必ず変えられていくことになるからです。つまり、それが私たちであり、それをお許しになるのがイエス様と神様なのです。そして、それは、今までそうであったように、今も、そして、これからも、イエス様の御許に身を寄せることが許されているのが私たちを作り上げるものなのです。祈りましょう。